

02 インタビュー

07 教えて！ 知るほどと 2024年からNISA制度は どう変わる？

11 連載「楽しみながら備える 新・防災術」
第2回 いざというときに備える
最低限の道具類とは？

14 マンガ「わたしはダマサレナイ!!」
強引な勧誘や解約の妨害、
高額なキャンセル料など
中古自動車の売却トラブルが増加中

17 金融教育の現場レポート ～商業科と連携した 英語科による金融教育～ 日本と諸外国の医療保険制度を 比較して社会の仕組みを学ぶ

22 おたよりコーナー 漢字矢印パズル

23 都道府県金融広報委員会一覧 編集後記

イントビューア

森 公美子

歌手、タレント、女優

圧倒的な歌唱力とチャーミングなキャラクターで

日本のミュージカル界には欠かせない存在の森公美子さん。

テレビで明るい笑いをふりまき、オペラ歌手でもあり、ジャズも歌う。

肩書を絞るのが難しい、生粋のエンターテイナーです。

歌に導かれたこれまでの道と、暮らしのこと、そして今の願いなど

さまざまなエピソードを表情豊かに語ってくださいました。

イタリアで大きな挫折を経験
ミュージカルとの出会いで復活

「それが、音楽への道を歩き始める最初の一歩になりました」。

先生を驚かせた『すごい声』
勧められて始めた声楽が
人生の扉を開く鍵に

幼いころから歌が大好き。当時人気
だった芸能雑誌『月刊平凡』の付録の
歌本が毎号楽しみで、それを見てコー
ドを覚え、小学生のときにはもう、ピ
アノでヒット曲の弾き語りを披露して
いたという森公美子さん。その歌声の
非凡さに気づいたのは先生たちでした。
「私、いい大人と出会ったんだと思い
ますね。ちょっと歌つたとき『すごい
声してるね』って言われたんです。す
ごい声っていうのがどういう声か、自
生が、私の歌声を聴くなり『あなた、
分にはわからなかつたんですけど（笑）。
その後中学1年で出会った音楽の先
声楽やりなさい！』って。それまで声
楽が何かも知らなかつたのに、面白そ
う！って思つちやつた」。

仙台市内の老舗旅館の“お嬢さん”として生まれ、ピアノや油絵をはじめ、1週間の予定がびっしり埋まるほど、さまざまな習い事をしてきた森さん。なかでも声楽は特別なものに。「すごく柔軟な両親で、子どもの中にいろんな可能性を見つけようとしてくれたんですね。それは習い事に限らず、いろんなものに触れて育つたのは大きかった。父はアメリカのポップスが好きだったので、私もちっちゃなころからダイアナ・ロスとかシユーピームスとかを聴いていて、自然とそういう歌が体の一部になっていたんですよ。だから、本当はクラシックの声楽向きじやなかつたのかもしれないんだけど（笑）。でもね、このクラシックがまさに“身を助く”で。大学に入る前にどうして音楽院に送って、声楽科のサマースク

森 公美子

「入学審査を受けたら見事パス。それが、音楽への道を歩き始める最初の一歩になりました。」

※取材は感染対策を徹底して実施しています

しかないんだろうなと思つたとき、もうどうしたらいいかわからなくなつてしまつた。すでに努力も限界に思えて落ち込みました。でもこの挫折があつたから、今の自分があるんだと思う。

ここからなんですよね、私の逆転人生は！」

叔母さまが気晴らしにと誘つてくれたミュージカル『マイ・フェア・レディ』を観て、演者たちの楽しげな表情に、森さんは度肝を抜かれます。それは、張り詰めた空気の中、緊張感の漂うオペラの舞台とはまったく違うものでした。

「こんなに笑顔で演技られるって、なんて私に向いてるんだろうと思った。

それと一緒に、イタリアに来てから忘れていた笑顔を思い出したんです。父ちゃんは笑顔で暮らしてるとか?」つて言わされたこととも重なつて、ああ、そうか、笑顔で勝負だ!って。自分を見つけた気分でした。

それまでの私は気持ちに余裕が全然なくて、料理が得意なのにイタリア料理も作らず、イタリアに染まろうともしていなかつたのね。ロンドンから帰つてからは、スローな“イタリア時間”にイライラするのはやめて、笑顔で心を開いたら、やつと自分の中にイタリアが入ってきたんですよ。それまでの苦しい3カ月は何だったの?っていうくらい、イタリアが大好きになりました。イタリア語も、毎日バルでおじちや



ミュージカルがやりたいーと、心の中で本気で望んだら、不思議と道が開けていった。
大切なのは“想い”的強さかもしれません

歌の力、音楽の力ってすごいんですよ。
みんなで笑顔になりたくて、

障がいを抱える人たちに

歌を教えるボランティアを始めました

んたちに教えてもらつて、すっごく上
達したんです。

ミュージカルをやるんだ！と心の中
で決めて帰国。すぐにオペラデビュー
を果たしますが、そのあと、何かに導
かれるように、ミュージカル出演への
道が開かれていきます。

「オペラスタジオの踊りの授業で私を
見つけた人がいて、ここに行つてと言
われるがままに訪ねた先が東宝でね。

ちょっと歌つて踊つてみせたら、台本
を渡されました。実は『ナイン』とい

うミュージカルのオーディションだった
んですよ。ミュージカルがやりたいな
と思いながらもどうすればいいのかわ
からずいたら、向こうからやつてきた
た。やっぱり“想い”って一番大切な
かもしれません。叶うんですよ。本当
に真剣に望んだなら、人の想いは何よ
りも速く、めざすところに届くものだ
と思っています。

劇場が一つになる瞬間がある それがミュージカル最大の魅力

2014年、ミュージカル『天使に
ラブ・ソング』を『シスター・アクト』
の初演で、帝国劇場初主演をつかんだ
森さん。以来上演を重ねるたびに多く
の観客を魅了してきたこの作品の幕が、
2023年11月、東急シアターおーブ
にて再び上がりります。

まだミュージカルを観たことがない、
興味はあってもチケットを買って足を
運ぶまでにはいたらない、そんな人た
ちを劇場に誘うなら？と聞いてみると、
「とにかく本気で歌つてますから！ ど
うやつたら面白いものを見せられるか、
出演者はみんなそれだけを考えて、1
ヵ月2ヵ月と真剣に練習して舞台に立
つわけですよ。ミュージカルの魅力と

「初演から数えて5回目の上演。あり
がたいことです。でも、再演を繰り返
すってつらいことでもあって、正解が見
つからないんですよ。毎回、見つから
ずに終わってる。今回は私に与えられ
た最後の機会だと思って取り組んでい
て、本当にパーソナルなものを自分
の中につくろうと頑張っています。体
力方面も上げていかないと！」

このコロナ禍を経験し、舞台人とし
て、あらためて強く思ったことがある
そうです。

「舞台って、お客さまがつくるんです
よ。お客さまがいて、ミュージカルな
らオーケストラがいて、演者がいて、
それらが一つになる瞬間がある。リモ
ートじゃダメなんです。お客さまが目
の前にいるのといいのとでは全然違
う。やっぱり舞台の空気を、声を、直
に届けたいし、心に残る何かを持ち帰
つてほしい。そういうなきやいけないだ
ろうと、すごく思つてゐるんです」。

まだミュージカルを観たことがない、
興味はあってもチケットを買って足を
運ぶまでにはいたらない、そんな人た
ちを劇場に誘うなら？と聞いてみると、
「とにかく本気で歌つてますから！ ど
うやつたら面白いものを見せられるか、
出演者はみんなそれだけを考えて、1
ヵ月2ヵ月と真剣に練習して舞台に立
つわけですよ。ミュージカルの魅力と

いたら、やっぱり一体感。ミュージカルは台詞だけでストーリーも理解できるし、予習も要りません。それこそ「推し」の誰かを目当てに行くのもいいし、そこで推しをつくるのもいい。何か楽しんでいただければいいなって。私ね、舞台の上で本当に楽しんでるんですよ。歌つていて、お客様も口角が上がつてくるのが見えると、うれしくなっちゃうんです」。

楽しいからごはんを作る 誰かのために自分のためにも

「仕事と家事っていうんじやなくて、どちらも“私のしたいこと”なんです。そりゃあ、したくない家事もありますよ。掃除とか片づけはだめで、そこはバイトにお願いしたりとか。でもキッチンのことに関しては、自分でやりたいんです。例えば夜中の2時に帰つてきても、豚肉が明日までもちそうになかつたら『ワンタン作ろ!』ってなるくらいに(笑)。

共演者に食べてもらおうとお弁当を作つたり、リハーサルの日は全員に

おにぎりと卵焼きなど簡単に食べられるものを用意したりと、とにかくマメ! 「時間がとれないっていう人は、時間の配分を工夫したらいと思う。『これを仕込んでおけば、あとはラク』とか。私は時間配分を考えるのが好きですね。でもルーズな時間も必要だし、そもそも楽しくなきゃ作らないのよ、ごはんも。私は料理が楽しいから、コロナ禍でステイホームしてたときには豚骨ラーメンも作りました。ネットでゲンコツを買い込んで、叩いて。近所から『異臭がします』って言わされましたけどね(笑)。いつも友達がおいしいって言ってくれる顔を見たくて作つてたけど、なかなか家に呼べない今は、自分のためにならぬところ。例えば仕事と家事は、どのように両立させているのでしょうか。

レシピ本も手がけるなど、芸能界きつての料理上手として知られる森さん。舞台を離れたその暮らしぶりも気になります。例えは仕事と家事は、どのように両立させているのでしょうか。

「仕事と家事つていうんじやなくて、どちらも“私のしたいこと”なんです。そりゃあ、したくない家事もありますよ。掃除とか片づけはだめで、そこはバイトにお願いしたりとか。でもキッチンのことに関しては、自分でやりたいんです。例えば夜中の2時に帰つてきても、豚肉が明日までもちそうになかつたら『ワンタン作ろ!』ってなるくらいに(笑)。

「仕事と家事つていうんじやなくて、どちらも“私のしたいこと”なんです。そりゃあ、したくない家事もありますよ。掃除とか片づけはだめで、そこはバイトにお願いしたりとか。でもキッチンのことに関しては、自分でやりたいんです。例えは夜中の2時に帰つてきても、豚肉が明日までもちそうになかつたら『ワンタン作ろ!』ってなるくらいに(笑)。

抱え込まずに助けを求める それはとても大切なこと

森さんは、結婚して5年目に事故に遭い、半身不随になったご主人がいます。介護を続けてもう17年に。

「私は外で大勢の人会う仕事だし、今はまだコロナが怖くて、施設に入つてもらつたままなんです。この間に彼は、肝臓にがんが見つかって手術しました。本当に、いろんなことがありますよ。ありますけど、いちいち凹んでいたら何もできないんで。『早期発見でよかったねー。スパッと切れた

よ!』って。幸いその後は転移もなく順調です」。

事故が起つてすぐのころは、手だけもわからず暗闇の中。交通事故で健保が使えるケースではなかったため高額の医療費が日々かさみ、蓄えも底をつきそうになります。 「ぼろぼろ泣きながら、区役所に相談に行きました。本当に何もわからなかつたから、弁護士をつけるところから一つひとつ教えてもらつて。まずは障害者手帳を取つて、給付があるのでその点数の中で介護の人を雇いましょうとか、そういうのを全部やつてもらつ

舞台と客席の一體感が、ミュージカルの醍醐味です!



た。家もバリアフリーに替えなきやい

けなかつたし、車椅子も外用と家の中
用は別に必要だし。そういうこともね、

福祉課の人に相談しながら、一つずつ
クリアしていくんです」。

すべて自分が担うべきものと思つて
いた介護も、人に頼つていいのだと気
づいたことで救われたのだそう。

「あのね、プロがいるんですよ。プロ
に任せればいいんです！ 日本はこれ
から、もっともつと福祉大国になつて
いかなきやいけないと思うんですよね。
どこよりも高齢者が多くなる国だと、
もうわかつてんんだから」。

森さんが強く訴えるのは「助けてく
ださい」という言葉の大切さ。

「ほとんどの方が『助けてください』
は恥ずかしい言葉だと思つていて、い
ざというとき言えないんです。私はね、
主人の車椅子を押してて、段差で『あ、
これは上がらないな』と思つたら、大
きな声で『手伝つてください！』って
言いますよ。そしたらひょいと上げて
くださる方がいる。本当は皆さん、手
伝う準備はしてらっしゃるんです。だ
から『助けてください』は、それを言
う側だけじゃなくて、手を貸す側に
とっても必要な言葉。素直に言える、
やつてあげられる、そういう世の中に
なればいいなあ。みんなが優しい、そ
ういう国にしていかないといけないん

じゃないかなあつて思うんですよ」。

歌の力と自分の可能性を信じて 挑戦を続けていきたい

歌の持つ力を森さんが実感したのは
東日本大震災のとき。公演中だった『レ
ミゼラブル』の千秋楽を終え、出演者
たちを連れて被災地を訪ねたのは、6
月になつてからでした。

「石巻の中学校で『ユー・レイズ・ミー・
アップ』っていう歌を歌つたとき、教
室全体が嗚咽に包まれたの。たぶん子
どもたちは、泣いやだめだつて、
ずっと我慢してたと思うんですよ。そ
のガチガチに自分を縛つていた何かを、
歌でちょっと緩めることができたのか
もしれない。支えてあげられたのかも
しない。歌うことしかできない、が
れきの一つも片づけられない私たちだっ
たけど、これでよかつたんだと思えた
瞬間でした。音楽の力を信じられたらし、
むしろ私たちが元気をもらえた。あの
日のことは、きっと一生忘れないと思
いますよ」。

涙ぐみながら話してくれた森さん。
音楽の力で人を幸せにするために、今、
新たな取り組みも。

「ボランティアで、障がいのある人た
ちに歌を教え始めたんですよ。私は歌
が専門だからそれしかできないんです
けど、歌での楽しみ方を伝えたり、そ

ういうコミュニケーションを通じて、皆
さんに笑顔になつていただけたらと。

障がいって、100人いたら100通
りじやなく、それこそ3000通りく

さんになると、自分だけではとてもでき
ない。いろんな人を引っ張ってきて、介
護する人たちも巻き込んで、音楽を分
かち合う楽しい瞬間をつくれたらいい
な。難しいこともあるだろうけど、障
がいのある人たちを、まずはちょっと
でも楽しめさせられたらと思っています。

この活動は、ライフケアとしてずつ
とやつていくつもり。賛同して手伝
てくれる、一緒に歌つてくれる、ミュ
ジカルの仲間を探しているところで
す」。

53歳で『天使にラブ・ソングを／シ
スター・アクト』のデロリス役と出
合い、その役を10年間プラッシュアップ
し続けてきた森さん。さまざまな役
への挑戦はもちろん、2022年から
本格的にジャズ歌手としての活動も始
めるなど、歳を重ねるごとに可能性の
幅を広げています。

舞台もね、私は『主役じゃないと嫌、
端役はやりません』なんて言いません
よ。だってそんなのつまらない。来た
役はみんな試してみて、私なりに面白
く演じてみせるっていうスタンスで
す。いくつものポケットから毎日違う
自分を取り出して、演出家に『どれに
する？』って見せていただき。自分の
可能性は一つじゃないっていうことを、
自分自身、常に考えてみたいです
ね」。



プロフィール

森 公美子
もり・くみこ

1959年宮城県生まれ。1982年『修道女アンジェリカ』でオペラデビューし、翌年『ナイン』でミュージカルデビュー。2014年初演の『天使にラブ・ソングを／シスター・アクト～』の主演では、翌年の第40回菊田一夫演劇賞を受賞。数多くの舞台作品への参加のほか、歌手活動、テレビ出演など多方面で活躍中。